

別紙 4

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目

幼児期の自閉スペクトラム症児における
社会性の発達 ―表情理解に焦点を当てて―

氏 名

佐野さやか

論 文 内 容 の 要 旨

本論文の目的は、幼児期の自閉スペクトラム症（Autism Spectrum Disorder；以下、ASD とする）児の社会性の発達について、社会性の発達と関連が強いと考えられる表情理解の発達に焦点を当てることを通して、検討することである。

社会性という概念は、これまで研究者間で一致された定義がない（鶴・安藤，2007）。「人と関わる能力の総称」（別府，2014）という包括的概念であるとともに、感情認知や共感性、感情表出、心的状態や心の理論、集団規範や協調性、対人認知や対人行動と多岐にわたる概念から成る（杉村，2018）多義的概念でもある。本研究では、ASD 児・者における社会性について検討するにあたり、DSM-5 による「社会的コミュニケーションおよび対人的相互反応における持続的な欠陥」という記載をもとに、「社会性」を「社会的コミュニケーションおよび対人的相互反応」と定義する。

ASD 児にとって、このような社会性の困難さは中核的な課題であり、母親と愛着関係を築くことが難しかったり（伊藤・近藤・木原・松田・小島，1991）、集団参加に深刻な影響を与えたりすることがわかっている（Derosier, Swick, Davis, McMillen, & Matthews, 2011）。そのため、近年、社会的スキル訓練（Social Skill Training; SST）や JASPER（Joint attention, Symbolic Play, Engagement, and Regulation）等の社会性を支援する取り組みが盛んに行われてきているところである。

しかし、これらの取り組みは主に ASD の診断や ASD の傾向を何らかの形で指摘された児を対象としている場合が多く、まだ明確な診断がされていない幼児期の ASD が疑われる児を対象とした研究は少ない。これまでの研究では、親は、子が診断を受ける前から気になる兆候を感じていることが明らかになっている（柳楽・吉田・内山，2004）。また、兆候に気づいてから診断名がつくまでの時期が、親にとっては最もつらい時期であることも指摘されている（宮内，2012）。ASD と診断されるのは幼児期を過ぎた時期となることが多いが（倉澤他，2019）、こうした研究を踏まえると、3 歳以下の ASD と

診断される前の幼児における社会性の特徴を明らかにし、より早期に支援を提供できるよう知見を積み重ねることが必要であると考えられる。

そこで本論文では、第1章において、まず一般の幼児の社会性の発達に関する先行研究を概観し、社会性の発達が表情を見ることの発達と関連が強いことを明らかにした。また、幼児期の ASD 児の社会性と ASD 児・者の表情理解についての先行研究をまとめた。その結果、幼児期の ASD 児は社会性に困難さが認められることや表情理解の特徴が一般の幼児とは異なることが明らかになった。具体的な幼児期の ASD 児の社会性の特徴としては、他者への注目や共同注意行動が少ないこと、動作模倣に困難さがあること、社会的参照を行わないことが挙げられた。ASD 児・者の表情理解の特徴としては、表情に対する注視のしにくさや、同定能力の低さ、一般の幼児に認められる「幸福顔の優位性」(桐田, 1993) が認められないこと、顔を部分的に認知しやすいことなどが挙げられた。これらのことから、幼児期の ASD 児の社会性の困難さの背景の一つに表情理解の苦手さが関連している可能性を指摘し、本論文全体の問題と目的について述べた。

次いで第2章では、新版 K 式発達検査 2001 (以下、K 式) を用いて、幼児期の ASD が疑われる児と一般の幼児との発達検査結果の比較を行い、幼児期の ASD が疑われる児の発達的特徴を明らかにした。その際、特に社会性や表情理解に関わる発達検査項目に着目して検討した。ASD が疑われる幼児 29 名 (平均年齢 2 歳 5 か月 ± 4.0 か月) と、一般の幼児 22 名 (平均年齢 2 歳 3 か月 ± 3.3 か月) に K 式を実施し、検査結果を分析したところ、ASD が疑われる幼児は一般の幼児に比べて全領域、認知・適応 (以下、C-A) 領域、言語・社会 (以下、L-S) 領域において発達指数が低いことが認められた。また、K 式の各項目の通過率について検討した結果、「表情理解 I」、「トラック模倣」、「形の弁別 II (8/10)」、「折り紙 I」、「大小比較」、「用途絵指示」、「長短比較」において ASD が疑われる幼児は一般の幼児に比べて通過率が低いことも見出された。このうち、「トラック模倣」や「形の弁別 II (8/10)」、「折り紙 I」は C-A 領域に含まれる項目であるが、課題の遂行には模倣や共同注意の力が求められる。この点を踏まえ、今回の結果には ASD が疑われる幼児の社会性の困難さが影響を与えている可能性について指摘した。

そして第3章では、表情理解に特化して詳細な検討を行うために、K 式の「表情理解 I」と「表情理解 II」、およびそれをもとに作成した「オリジナル表情課題」の結果を分析した。「オリジナル表情課題」は、先行研究において ASD 児の表情理解の特徴として、顔の上半分よりも下半分を同定しやすいことや (Landgell, 1978)、他者の口に焦点を当てやすいこと (Klin et al., 2002)、目への注目が少ないこと (北

山, 2008) が見出されているため, 「目」あるいは「口」への注目に焦点を当てて検討できるよう作成された。ASD が疑われる幼児 31 名 (平均年齢 3 歳 1 か月 \pm 2.8 か月) と一般の幼児 28 名 (平均年齢 2 歳 11 か月 \pm 2.9 か月) に, K 式と「オリジナル表情課題」を実施し, K 式の「表情理解 I」, 「表情理解 II」の通過率や「オリジナル表情課題」の通過率を分析した。その結果, ASD が疑われる幼児は一般の幼児に比べて, 表情理解が遅れて発達することや「喜び」表情の理解が難しいこと, 「怒り」表情において「目」を判断材料として活用できていないことが示唆された。この結果から, ASD が疑われる幼児の表情理解の発達プロセスは, 一般の幼児のそれとは異なる可能性があると考えられた。

さらに第 4 章では, ここまでで明らかになった ASD が疑われる幼児の特徴が変化しうるかについて検討するために, ASD が疑われる児とその親を対象に実践されている早期支援教室時の親の子への関わりの変容 (研究 1) と, 早期支援教室参加後の ASD が疑われる幼児の発達検査結果の推移 (研究 2) について分析した。

研究 1 では, 早期支援教室に参加することによる親の子どもに対する関わりの変容プロセスについて, 親の主観的な体験をもとに質的な検討を行った。2 クール (8 か月間) 早期支援教室に参加した 13 名の母親による, 早期支援教室への継続参加前後, 中盤, および参加した各回のアンケートの記載事項を分析した。その結果, 母親は, I 期: 我が子の否定的な側面に着目し, 子どもへの関わりにくさを感じる時期, II 期: 我が子の成長した側面に目を向け, 関わり方の工夫を始める時期, III 期: 我が子に対して詳細に観察し, 関わりにくさを再認識する時期, IV 期: 我が子と自身の成長を振り返り, 自分たちなりの関わり方を確認する時期というプロセスを経て, ASD が疑われる児との関わり方を変容させていくことが明らかになった。

研究 2 では, 早期支援教室に参加した後の ASD が疑われる幼児の K 式の結果について, 検査結果の推移を検討した。分析の結果, 全領域と L-S 領域において有意に発達指数が高くなったことが認められた。K 式の各項目の通過率については「四角構成 (例後)」と「表情理解 II」の項目通過率が上昇せず, 表情理解の特徴 (Osterling et al., 2002 など) は変わりにくいことが示唆された。

第 5 章では, ここまでの研究を総括することによって, 幼児期の ASD 児における社会性の発達と表情理解の発達について整理し, 3 歳以下の ASD が疑われる幼児は一般の幼児に比べて, 全般的に社会性の発達に遅れが認められ, 表情理解の発達においてそれが顕著に表れることを示した。また, 社会性を育むことを目的とした早期支援の在り方について提起した。最後に, 本研究の限界を述べるとともに, 今後の展望として, 日常生活における社会性の変化に関する調査や, 他の実験刺激を用いた表情理解の研究, 状況や文脈によって異なる表情の意味の理解に関する研究などをしていくことの必要性を考察した。また, 早期支援教室への参加によって ASD が疑われる幼児の発達が変化したかという因果関係を検討するために対照群

を用いた実証的研究の必要性等も考察した。